

鎌倉の地域商店街を結節点とした生活体験型観光による再生計画

都市空間生成研究室
1741101 高橋 明葉

商店街再生 マイクロツーリズム 日常観光
生活体験 結節点

1. 研究の背景と目的

観光地として賑わう鎌倉はコロナの影響で観光地として活気がなくなってきた。現在、外国人観光客が来ることができなくなりました。

さらに、スポット化による国内観光客の観光もパターン化することで観光客減少につながるおそれがあると考えた。

そこで、鎌倉の産業の根幹であるインバウンド中心である観光から、県内の人、地域に住んでいる人が足を運ぶことを目指す計画を提案し、生活体験型の観光地を目指す。

2. 鎌倉の変遷と街の現状と課題

2-1. 変遷と現状

鎌倉市は最も観光客訪問の多い施設である鶴岡八幡宮と、その参道、若宮大路を中心に、「三方を山、一方を海に囲まれた地形」をしている。1889 年には現・JR 横須賀線鎌倉駅が開業、1910 年は江ノ島電鉄鎌倉駅が開業し、温暖な気候から別荘地や海水浴場として注目を集めた。

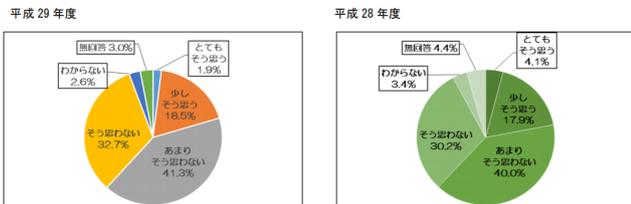


図 1. 生活しやすい市街地が形成されているか

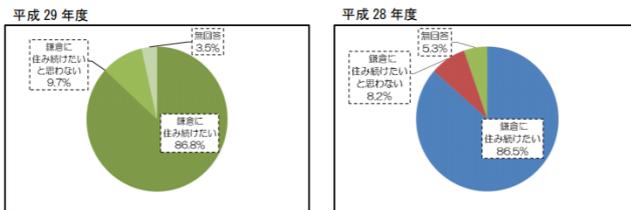


図 2. これからも鎌倉に住み続けたいか

2-2. 課題

まちづくりにおいて、生活しやすい市街地ではないと感じている人が多く、歩行空間などについても満足に思っている人は少ない。しかし、住み続けたいと感じている人が9割以上であること。さらに、鎌倉の地域商店街の衰退と高齢化によるコミュニティの衰退も課題である。

3. 鎌倉の観光地としての現状と課題

3-1. 現状

観光の特徴として、「人口・市域の面積に対して多くの観光客が訪れていること」「訪れる観光客が、季節的・時間的・地域的に見て偏りがあること」などが挙げられる。鎌倉市内の著名な観光施設が集中する地域では混雑や渋滞が起りやすい。現在はコロナの影響で、外国人観光客の大幅な減少と国内観光客の自粛による影響がある。

表 1. 外国人観光客の推移（小町通りに面する居酒屋）

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度	令和2年9月
インバウンド客数	1941 人	1401 人	2440 人	0 人

3-2. 課題

コロナによる外国人観光客の減少による観光地としての衰退。国内の観光客は戻りつつも今までと同じ観光場所、観光の楽しみ方ではリピートは見込めない。そして、地域の人には観光復興についての理解度は高いが、協力しようとしていないため地域のコミュニティが弱い。

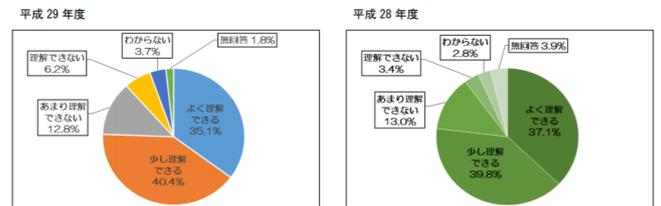


図 4. 観光復興の理解度

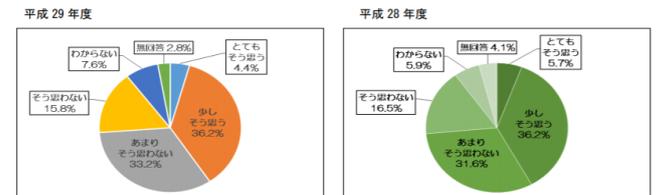


図 5. 地域のコミュニティ活動が盛んなまちか

3-3. 計画対象地について

本研究では対象地を「旧鎌倉」とする。（鎌倉市で行政上、地域を玉縄地域、大船地域、深沢地域、腰越地域、鎌倉地域に分けている。「鎌倉市」と区別するため、この「鎌倉地域」を「旧鎌倉」とする。）

このエリアは鎌倉のまちの特徴であり、商店会など、昔から残っているものが多い。商店会周辺は昔から旧鎌

倉で暮らしている人が多く、最近では衰退している場所もあり、新たに観光客との交流や現在のスポットとつなげることで、観光場所として栄え、街の結節点になり、面的な観光地を目指すため設定した。

4. 全体計画コンセプト

「結節点」つなぎめ、むすびめ

観光場所と観光場所をつなぐ、商店街と観光場所をつなぐ、観光客と住民をつなぐ、住民と商店街の人をつなぐ商店街の人と観光客をつなぐ結節点から広がる

今回の目的として鎌倉をインバウンド型のスポットに集中した観光だけではなく、生活景を身近に感じ、その体験をすることで生活体験型の観光地目指し、地域商店街を「結節点にする」というコンセプトのもと空間を作っている。昔からある商店街には今までの観光場所とは違う日常の体験ができ、新しい観光を目指すうえでふさわしい空間なのではないだろうか。

5. 計画プログラム

5-1. 材木座商店街

材木座商店会の現状

昭和初期に建てられた建物が多く、今では老朽化に加え空き家が増えている。しかし、昔からの商店街のため地域住民のコミュニティは強く、仕事終わりの夜に集まることが多い。さらに、材木座海岸はサーフィンが有名で、体験ができる場所もあり、人は多く集まるが、商店街に立ち寄る人はいない。

・コンセプト

「たまり場からひろがりつながる」

・プログラム

- ①空地での屋台や広場
- ②道路への溢れだしと交流
- ③宿泊施設エリア



図-6. エリア②のイメージ図

・本計画によるエリアイメージ

空き家の建て替えによるゲストハウスをつくることで時間を気にせず商店街を楽しめ、サーファーが通るだけだった場所に屋台やベンチを置き立ち寄りやすさ、手軽さがあることで人が集まり商店街の賑わいを創出。地元の人だけのコミュニティからサーファーや観光客を加えたコミュニティの形成と生活体験を提供する。

5-2. 由比ガ浜大通り

・由比ガ浜大通りの現状

長谷駅・大仏・鎌倉駅などと近く、他の場所に観光客が流れているためなかなか商店街にとどまる人が少ない。さらに、古い建物が歩道に沿って建っていることでファサードの圧迫感があり、アイレベルの魅力も低い。そのため、通過される商店街になっている。

・コンセプト

“つなげて広がる歩行空間”

ウォークアブルで居心地のいい商店街

・プログラム

- ①生活景と緑の溢れだし
- ②広場とベンチによる近隣とのつながりと滞留空間
- ③開放的な歩行空間



図 7. エリア①開放的な歩行空間

・本計画によるエリアイメージ

この通りの特徴として、建物が歩道沿いに立っていることにより窮屈感がある。そこで、民地を下げ、車道を狭くすることで歩道を拡大し、街路空間をウォークアブルかつ居心地の良い空間へ変えようと考えた。そこで歩行空間にパークレットを置くことで、歩くだけでなく、立ち止まることでこの通りの日常と風景を味わえる場所になるのではないかと。

そして、人が集まることによりそこで賑わいが生まれ、通りとしても観光地としても魅力のある場所を目指す。

参考文献

- 1) https://www.mlit.go.jp/singikai/infra/city_history/historic_climate/koto/2/images/s_hiryu2-1.pdf
- 2) <http://library.jsce.or.jp/jsce/open/00897/2011/A22D.pdf>
- 3) <https://www.city.kamakura.kanagawa.jp/shoukou/omise2006/mokuji/chizu.html>
- 4) <https://www.city.kamakura.kanagawa.jp/keiki/documents/h29gaiyo.pdf>